戦後「新建築」誌における建築家の創作論

建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル

ARCHITECTURAL THEORIES IN "SHIN-KENCHIKU" AFTER WORLD WAR II

Thoughts on housing and city, design themes, spatial conceptions
by contemporary Japanese architects

奥山 信一*, 坂本 一成**

Shin-ichi OKUYAMA and Kazunari SAKAMOTO

In this report we intend to illustrate the contents of the discourses concerning architectural design written by contemporary Japanese architects, through investigating the articles in "SHIN-KENCHIKU" journal after world war II.

From this point of view, we already reported several theses that clarify the contents of housing theories, urbanism, and design theories written by architects in the journal. In those theories, there are phrases expressing "Thoughts on Housing" "Thoughts on City" "Design Themes" "Spatial Conceptions" by architects. In the previous reports, such phrases are extracted from each articles and their contents are compared with each other.

This time we aim to illustrate the transition of the contents of architectural theories by contemporary Japanese architects, and the distinctive meanings of "Thoughts on Housing" "Thoughts on City", through synthetically investigating the results obtained in the previous reports.

keyword: *thought on housing, thought on city, design theme, spatial conception, contemporary Japanese architect*

住宅観、都市観、創作の主題、空間モデル、現代日本の建築家

1. まえがき一本論の目的と概要

建築家にとって、現実の設計活動が実体の水準での架構法や空間構成を提案するものであるのに対して、言語的な創作活動は、建築の思考の枠組み、つまり建築設計の論理を提出する重要な表現手段であると考えられる。それ故、これまで多くの建築家は、優れた建築物の創出に専心すると同時に、そうした建築を生み出す際の自身の考えを言語化し、論理を構築することにも努めてきたといえる。こうしたことから、建築家の言説あるいは建築論に関する研究は、建築意匠・設計学の主要なテーマの一つとして、これまでも数多くなされてきている¹⁾。しかし、そうした建築家の多様な言語的活動の中でも現代のものを、総体的かつ相対的に検討し論じた研究は見だし難い。このことは、建築家の言説が特定の作家の内面的な体系ないし作家活動を前提として位置付くもの、あるいは特定の共有された建築思潮の内で成立するものと捉えられ、そうした枠組みを超えて位置付けられ

るものではないとこれまで考えられてきたことを意味していると思われる。

しかし今日での建築的な思考は、多数の建築家の言説の共時的な関連において形成されていると思われるし、また現実の社会で設計活動を行っている建築家も、そうした状況の中で建築的な発言あるいは著述をなしていると考えられる。こうしたことから、現代の建築家の思考を設計の論理として位置付ける上で、多数の建築家による言説の総体が作り出す意味の枠組みを求めることは、ひとつの有効な方法として成立しうるものと考えられる。

以上のような主旨・視点に基づいて、筆者らは、限定した範囲²⁾ではあるが現代日本の建築家による言説の内容に関して検討し、その結果を数編にわたって報告してきた。それらは以下に示す二つの側面にかかわる論考を、建築家の創作における重要な言説として位置付け論じたものであった。ひとつは、住宅および都市を建築家の創作を前提とした観念的な水準における思考対象の空

* 東京工業大学工学部 助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

** 東京工業大学工学部 教授・工博

Prof., Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

間的な振れを示すものと考え採り上げたもので(住宅論, 都市論)³⁾, それらを検討した既報は, 建築家が住宅を如何に考え, そして捉えてきたか(住宅観), および都市を如何に考え, そして捉えてきたか(都市観), を論じ明らかにしたものであった。もう一つは, 具体的な建築作品の発表に際して著された論考を, 現実の建築設計という創作活動との対応の中で形成された重要な言説として位置付け採り上げたもので(創作論 1, 創作論 2)⁴⁾, 建築家がどのような主題をもとに創作に臨んできたか(創作の主題), あるいはどのように空間を構想してきたか(空間モデル), などを論じ明らかにするものであった。

こうしたことを踏まえて, 本論文では, 上述した筆者らによる既報で得られた結果相互の関係を総合的に検討・考察することを通して, 現代日本の建築家の創作にかかわる言説の内容の通時的な推移を明らかにし, さらに建築家にとって重要な創作対象と考えられる住宅および都市に対する観念的な言説の意味を, 現実の空間をいかに構築するかという空間的思考との関係において位置づけることを目的とするものである。

ここで, 建築家の言説という事柄に対する筆者らの立場を明確にしておく必要がある。一般に, 建築家の言説といっても, ジャーナリズム等の媒体を通して社会的に表明されたものから, そのように活字として社会化されぬ, 設計者の内面に潜在しているものまで多岐にわたる。この論文では, その内の前者, つまり建築家が設計に際して意識的に構築し, それを社会的に言語化した建築設計の論理を問題としている。このような, 社会的声明を前提とした建築家の言説を扱う本論文の意義は, 実体としての建築作品の創出と同様な水準において概念的に構築され, かつ発表された, 建築家の言説空間の内容を位置付けることにありと考えている。

具体的な検討に入る前に本論の内容の概略を述べる。これまで報告してきた既報では, まず検討の対象とした論説が, 基本的にどのような問題意識を前提として著さ

れているか, つまり個々の論説の内容の底流となるテーマが如何なるものであるかを検討している。このことはそれぞれの論説がどのような状況認識の基に著されたものであるかを主に通時的な側面から捉えることであったといえる。次にそのことを踏まえて, それぞれの論説において最も特徴的な言説を抽出して, その内容を KJ 法⁵⁾を基に総体的かつ相対的に検討している。たとえば, 今述べた特徴的な言説とは, 住宅論では「住宅は・・・である」といった記述(住宅観), 都市論では「都市は・・・である」といった記述(都市観), 創作論 1 では設計に際して最も中心的な内容を示した記述(創作の主題), 創作論 2 では自身の設計した空間に関する概念, イメージ, 操作等に関する記述(空間モデル), などである。このような言説を抽出してその内容を検討することは, 現代日本の建築家の創作に関わる観念的な言説の意味の枠組みを求めることにあったといえる。

すでに述べたように, 本論文は上記の既報で得られた結果を総合的に検討・考察するものである。そこで本論第 2 章では, まず, 現代の建築家の創作に関わる状況認識の流れを把握するために, 各既報で個別に論じた住宅論・都市論・創作論 1 の内容の推移を, 主に通時的な視点から総合的に検討・考察する。そうした創作的な思考の流れの中で, 現実の空間をいかに構築するかという内容は, 近年特に重要と考えられることから, 第 3 章では, 具体的な空間構想に最も直接的にかかわる既報 4 での「空間モデル」の内容を, 既報 3 での「創作の主題」に関する検討結果を前提として再度考察する。続いて第 4 章では, 具体的な空間構想とは異なる建築家の観念的な思考対象に関する検討であった既報 1 での「住宅観」の内容と既報 2 での「都市観」の内容を対比的に考察することで, 住宅・都市双方に対する建築家の思考の特性を明確にし, さらにそれらを第 3 章での結果を踏まえて考察することで, 「住宅観」「都市観」という抽象的かつ観念的な言説の意味を具体的な空間構想との関係のうちに位置付けている。

表 1 住宅論・都市論・創作論 1 の内容の推移

	'46	'50	'60	'70	'80	'90
住宅論 (既報 1)	環境的な 状況認識 住宅の 工場生産化	機能主義批判と対応した平面をめぐる内容 新日本調などの和風のデザインにかかわる内容		住宅の工場生産化、つまり住宅 産業とそれを生み出した都市的 な社会状況に対する建築家の対 応に関する内容	社会状況との関わりの中での住宅の 創作に対して、否 定的な側面での内 容	
都市論 (既報 2)	都市計画制度、計画家の職能についての議論な ど、都市を計画する上での大きな枠組みについ て論じる都市論			都市の美観を論じるもの、コ ミュニティや公害による環境破 壊といった側面から、都市を社 会的に論じる都市論	都市のイメージや記号作用 に注目し、都市環境を論じ る都市論	
			建築を中心とした計画で都市を論 じる都市論 (都市プロジェクト)			
創作論 1 (既報 3)	人間の生活を機能的に捉え、それらを空間的に、都市デザイン的にどの ようにまとめるかと言う問題認識から論じる設計論			都市の状況や建築界の動向を視野においた上での、形 態、空間、領域・場、構成といった建築の実体がもた らす概念的な内容に関わる問題認識から論じる設計論		

2. 建築家の創作論の内容の推移

既報1～3で個別に論じた住宅論，都市論そして創作論1の内容の推移をあわせて示したのが表－1である。

これよりまず，住宅論(既報1：第2章)では，'40年代は，戦後の荒廃した国土を復興させるための環境的な状況認識と現実の建築を多量にしかも早急に供給するための技術的な模索(住宅の工場生産化)に関する内容がほとんどであり，'50年代初頭から'60年代後半までは，機能主義批判と対応した平面をめぐる問題と新日本調などと呼ばれる和風のデザインにかかわる伝統の問題に関する内容が主なものであった。'60年代後半から'70年代後半までは，終戦直後に多くの提案がなされたにもかかわらず，敗戦による衰弱した日本の産業力のためか，なかなか社会に普及し得なかった住宅の工場生産化が現実のものとなった時期で，そうした住宅の工業生産化つまり住宅産業とそれを生み出した都市的な社会状況に対する建築家の対応を中心とした内容であった。'70年代後半以降は，生産技術や伝統・芸術といった文化的な内容を除いた幅広い内容で語られており，具体的には住宅の創作に対して否定的な側面での内容が多く見受けられた。

一方，都市論(既報2：第2章)では，'60年代初頭までは，都市計画制度や都市計画家の職能についての議論など，都市を計画する上での大きな枠組みについての論考が中心であったといえる。そしてそれらとオーバーラップして，建築を中心とした計画で都市を捉える論考，その多くが具体的な提案を伴った，いわば都市プロジェクトとでも呼べるものが'60年代を中心に多くみられた。'60年代後半から'70年代にかけては，都市の中での美観を論じるもの，また広場，公園，集合住宅を題材としたコミュニティーや，公害による環境破壊といった側面から都市を捉える論考など，都市を社会的に論ずるものが比較的多くみられた。また都市のイメージや都市の中での記号作用に注目して都市環境を論じる都市論を'80年代に多くみることができた。

以上が既報1における住宅論，および既報2における都市論の内容に関する検討結果の大略である。次にこれら双方の通時的な推移をあわせて考察する。

住宅論における住宅供給のための技術的な提案あるいは人々の生活様式にかかわるであろう機能を前提としたプランニングの問題，そして国家的な様式と必然的にかかわらざるを得ない伝統の問題，および都市論における都市を計画することを前提とした論考や具体的なプロジェクトの提案などは，建築家の設計活動を社会との直接的な関係の内に積極的に位置付けようといった建築家の創作に対する理想が前提になっていると考えられる。これに対して，住宅論での住宅産業および都市的状況との関わりにおける論考，あるいは都市論における美観，コミュニティー，環境破壊といった側面から都市を捉える論考などは，現実の都市的な社会現象との対応を前提とした論考であるといえる。

これらをまとめると，戦後の建築家の住宅論と都市論の内容は，建築家の創作態度と社会との関係を，積極的に創作的な思考において捉えようとするのか，それとも対応すべき現実的な現象として捉えようとするのかという点において，その問題とするところが，1970年前後を境として移り変わったものと位置づけることができる。

こうした70年前後を境とした建築家の思考の移り変わりは，住宅論や都市論に比べてより直接的に創作を問題とした論考であった既報3での創作論1の内容に関する検討において，最も顕著にみられるものであった(既報3：第2章)。それは「人間・生活を機能的に捉え，それらを空間的に，あるいは都市デザイン的にいかにまとめるかという問題認識から，都市の状況や建築界での動向を視野においた上での形態，空間，領域・場，構成といった建築の実体がもたらす概念的な内容にかかわる問題認識へ」⁹⁾といったものであり，このことを既報3ではさらに，「建築を社会的なあるいは環境的な存在として成立するものと捉える思考から，建築固有の自律的な関係の内に建築を成立させる根拠を見いだそうとする思考へとといった，建築を成立させる合理を如何なる水準で捉えるかという視点の移り変わりを示していると考えられる」¹⁰⁾と考察した。さらにそうした状況認識と連動してか「創作の主題」の内容も，'70年前後を境として，ほぼ建築の自律的な修辭的操作に関するものであった。

以上，これまでの考察を総括すると，現代の建築家の創作にかかわる論考，つまり住宅論，都市論，および創作論1の内容の大勢は，1970年前後を境として，建築家の創作活動の役割を社会との直接的な関係の中で位置付ける高き理想に準拠したものから，巨大化した現実の都市あるいは社会の状況と対応しつつ，建築の実体がもたらす概念的な内容に準拠したもの，いわば建築固有の修辭的な体系の内に創作活動としての活路を見いだすものへと移り変わってきたと捉えることができる。

3. 建築家の創作における修辭に関する言説

一空間的な思考における体系的側面と現象的側面

前章では，建築家の創作論(住宅論，都市論，創作論1)の内容の重心が，創作活動の役割を社会との直接的な関係の中で位置付けるものから，建築固有の自律的な修辭的側面に関するものへと，1970年前後を境として，推移してきたことを述べた。このことは，現代の建築家の創作的な思考を問題とするには，建築の空間に関する修辭的な内容を如何に捉えるかが，重要であることを示唆しているといえる。そうした建築の修辭的側面が最も明快に，しかも具体的に表明された言説は，資料的にも1970年以降のものがほとんどである既報4での「空間モデル」であると考えられる。このような視点から，本章で

は、「空間モデル」の内容について再度考察するものであるが、すでに既報4の第3章5節で、そうした「空間モデル」を抽象的かつ観念的に枠付ける上位の概念について一旦まとめている。そこでここでは、「空間モデル」に比して、より包括的な内容であった「創作の主題(既報3)」に関しての考察結果を前提として、建築家の「空間モデル」、すなわち空間的な思考の意味の枠組みを再考する。

既報3において、建築家の「創作の主題」の内容は、大枠、技術による合理化、機能に関する整合性、建築の修辭的操作としてまとめられ、個々の主題はそうした大枠での意味の広がりとの関係の内に見いだされるものであることを述べた⁸⁾(創作の主題の意味内容の関係図を簡略化して示したのが図-1である)。そうした意味内容の枠組みの中で、「階層的な空間構成」としてまとめられた主題は、多くの主題が抽象的に論じられるものであるのに比して、比較的具体的な設計の方法論として位置付けられるものであること、また年代にかかわらず見られるものであることなどから、建築家にとって基本的な創作の主題と考えられるものであった⁹⁾。その内容は具体的には以下の3つに要約できる。

- ①: 建築の内部から都市的な広がりまでを連続したものとして捉える内容(外部機能と内部機能の連続性)。
- ②: 単体としての建築の集合した状態を想定して建築を考える内容(個と全体の追求)。
- ③: 単体としての建築を、実体がつくり出す関係の総体として捉える内容(部分と全体による空間構成)。

さらに、①と②はともに都市デザイン的な視点から個としての建築を考えようとする内容であり、それに対して③は建築自体の空間構成を問題とするものであるといえる。

図-1 「創作の主題」の意味内容の関係図

こうした「階層的な空間構成」といった創作の主題は、以下に論ずることより、既報4で検討した建築家の空間モデルの基本をなす内容であると考えられる。

既報4で論じた建築家の空間モデルの意味内容は、内部と外部の二項対立関係の内に実体としての空間を構想する内容(「内部と外部の関係」)、部分と全体といった要素のヒエラルキーを如何なる水準で設定するかということの内に実体としての空間を構想する内容(「部分と全体の関係」)、さらに空間が醸し出す情緒性や虚飾な意味などを消し去ろうといった「無機性」、および空間のあり方を現実の素材の存在に託した「物質性」の追求といった空間自体の性質に関する内容、などでまとめることができるものであった。

このような空間モデルの意味内容のまとまりの中で、「内部と外部の関係」は、建築の領域概念の基本をなすものとして位置付けられ、ひいては単一の建築の内部空間から都市的なスケールの空間までをも含む内容であることから、また「部分と全体の関係」は、建築を実体の水準で構成する単位間の関係の基本をなすものと位置付けられることから、それらはそれぞれ「領域」「構成」といった概念を「階層的な空間構成」といえる建築的な形式でまとめようとする空間的な思考であるといえる。

このように、建築家の空間モデルにおける「内部と外部の関係」および「部分と全体の関係」は、既報3で「階層的な空間構成」として見いだした空間の形式的性格にかかわる創作の主題が、具体的な内容を伴って表明されたものと考えられることができる。

図-2 「空間モデル」意味内容の関係図

「内部と外部の関係」「部分と全体の関係」が空間の形式的性格にかかわるものであるならば、「無機性」「物質性」といった空間自体の性質に関するものとしてまとめられた内容は、空間を構成するモノ(物質)を抽象化あるいは具体化する思考であると考えられることから、それらはともに空間の物質的性格にかかわるものと捉えることができる。このような物質的性格にかかわる空間モデルの内容を、既報4では、「人間の視覚・知覚を前提に身体的な経験・体験をともなうて感じとられる空間の現象的な側面」¹⁰⁾として位置付けた。これに対して、形式的性格にかかわる内容は、先に述べたように、「階層的な空間構成」といった建築的な形式としての主題が具体化されたものであることから、基本的には、空間を実体的な要素の関係として捉える体系的側面によるものと言える¹¹⁾。しかしその中には、たとえば「…空間の奥深さを出すために、フレームのようなものが何重にも重なって奥へと手繰られていく連続した架構が設定された。…空間は連続した軸組の間をかすめ、あるいは奥へ奥へと手繰られていく…」¹²⁾といった記述に見られるように、そうした建築的な体系の内部に入り込んだ視覚的な状況について論じている内容、つまり現象的側面として位置付けられる内容も見いだすことができる。

以上、これまでの考察を踏まえて既報4での「空間モデルの意味内容の関係図」を簡略化して示したのが図-2である。この図に示したように、現代日本の建築家の空間的思考の意味の枠組みは、「領域」「構成」という建築的概念を、階層的な空間構成といえる形式でまとめようとする「内部と外部の関係」「部分と全体の関係」といった形式的性格と、空間を実体的水準で構成するモノ自体の

図-3 「住宅観」の意味内容の関係図

意味を追求する物質的性格、およびそれらを上位で枠付ける体系的側面、現象的側面によって捉えることができた。この図は、本研究の資料範囲の限定ではあるが、現代での建築家の空間的な思考に関する意味の枠組みを示すものとする。

4. 建築家の住宅観・都市観と空間モデル

現代日本の建築家が、住宅、都市といった建築的な思考の対象をどのように考え、そして捉えてきたかに関して、既報1および2で、それぞれ個別に検討論じてきた。これらの検討の背景には、スケールの違いはありながらも明確かつ基本的な建築的題材である住宅および都市に関する建築家の思想を考察することで、直接的には見だし難い建築家の建築観を、間接的に見だし、位置付けるといった目的と展望があった。そのためには、それぞれ個別に位置付けた住宅観および都市観の意味内容を総合的に検討する必要がある。そうした検討に関しては、既報2の第5章で、主に住宅観、都市観双方の「性格」的水準¹³⁾およびその通時的な推移を中心に論じ、その結果として、「住宅が人間あるいは設計行為といった内容との直接的な関係の中で常に問題とされてきたと言えるのに対して、都市はそうしたことから独立した、ある意味で自律的な思考の対象でもありえることを示している」¹⁴⁾と考察している。

そこで本章では、上記の考察結果を踏まえて、住宅観および都市観の具体的な意味内容を相互に比較検討することで、双方の特徴的な内容を見出すとともに、それらを前章で論じた空間モデルの意味の枠組みとの関連にお

図-4 「都市観」の意味内容の関係図

いて位置付ける。

4-1 住宅観・都市観相互の意味内容の関係

既報1で得られた住宅観の意味内容の関係図と既報2で得られた都市観の意味内容の関係図を、それぞれ簡略化して示したのが図-3、図-4であり、それらを対比させて表したのが表-2である。これらを見ると、住宅と都市といった対象こそ異なるものの、多くの意味内容は基本的に類似したものであることがわかる(表-2では、そうした類似した意味内容のまとまりを実線で結んでいる)。

たとえば、「人間の生活を支える」「生活を覆う」といった住宅観、および「人間の生を可能にする」といった都市観は、どちらも人間が生きるための機能的側面として住宅および都市を捉えているという点で、類似する内容といえる。また「居住者が関わることによって成立するもの」「人間生活そのもの」といった住宅観、および「人間の生活が関わることによって成立する」といった都市観は、人間あるいは人間生活の関与を、住宅および都市の成立条件や理想的な状況としている点で類似する内容といえる。一方、このように人間あるいは人間生活にかかわる内容を抽象的に捉えるのではなく、「人間の精神的な営みが形成するもの」といった住宅観、および「社会生活によって成り立つ」といった都市観は、人間生活に潜む経験や記憶、あるいは社会における共同意識などが具体的に表されたものであるという点で、類似した内容と

いえるものである。さらに「社会性」といった住宅観、「消費・社会現象」といった都市観は、人間の生活それ自体というよりは、人間の生活がつくり出す社会において、住宅・都市双方がどのように現象するかを示した内容であり、また「設計者が関わることによって成立する」「設計態度」「住宅の特殊性」といった住宅観、および「構築行為」「建築の集積が都市をつくり出す」といった都市観は、住宅・都市双方を、建築あるいは建築家の存在を前提としてはじめて位置づける概念、つまり創作の問題と強く対峙させることで成立する概念として捉えているものといえる。

これまでの考察を総合すると、建築家の住宅観および都市観に共通する内容は、大枠以下のようにまとめることができる。

- ①人間が生きるための機能的側面
- ②成立条件としての人間生活あるいは社会
- ③人間生活がつくり出す社会において現象する様態
- ④建築家にとっては必然的な創作(設計・構想)の対象

このように住宅観、都市観の意味内容には、多くの類似点を見いだすことができる。これらは、住宅・都市というスケールを超えて見いだされるものであることから、建築家の建築観の基底をなす内容であると考えられる。しかしその一方で、以下に示すように住宅観のみに見いだせる内容、あるいは都市観のみに見いだせる内容といった、住宅観、都市観双方の特徴を示すと考えられる意味内容も見ることができる。

表-2 「住宅観」と「都市観」の意味内容の関係図

住宅観において、「シェルター・休息の場」といった意味内容は、先に述べた人間が生きるための機能的な側面を標榜した「生活を覆う」「人間生活を支える」といった内容が、具体的かつプリミティブに人間を防御するといった意味合いを帯びたものといえる。また、こうした人間に対する保護機能を示した内容とは対照的に、住宅とその外の世界との融合した状態を理想的に示した内容として「住まいは自然の一部」といった住宅観を見ることが出来る。これらは、一面では相対立した内容を示しながらも、ともに住宅の外の世界、つまり環境あるいは社会との関連の内に住宅を位置付けている内容といえるものである。このような建築の対象外の問題との関係で成立する内容は、都市観には見いだすことができないことから、建築家の住宅観の特性を示す意味内容であると考えられる。

また都市観では、「成長・変動」といった都市自体のダイナミズムを表現している内容（「動的な性質」）、あるいは「統合性のシステム」「多様性の集積」といった何らかの構成の体系として都市を捉えている内容（「構成のシステム」）、およびそうした常に全体性を念頭に置いた都市観とは対極的に、知覚される風景として都市を捉える内容（「知覚性・複雑性」）などは、都市の自律的な性質や状況を表現したものといえる。このような建築の対象自体の自律的な性質や状況を示す内容は、住宅観にはみられないことから、建築家の都市観の特性を示す意味内容であると考えられる。

ここまでの考察をまとめると、先に示した住宅観、都市観双方の類似点としてみられる基本的な内容は、概略、既報で位置付けた「機能」「状態」「意味」といった性格的水準¹³⁾に、人間生活が作り出す社会、あるいは建築家にとって基本的な創作対象が投影された内容であるといえるのに対して、住宅観・都市観双方の差異を形成する内容は、住宅・都市という建築の対象自体に内在する空間的なあり様にかかわる概念であると考えられる。

4-2 住宅観・都市観と空間モデル

前節では、住宅観、都市観双方の内容を対比的に考察することで、それらの特性を示すと考えられる意味内容を見いだした。そうした住宅観・都市観双方の特徴的な内容と、前章で論じた建築家の空間的な思考の意味（空間モデルの意味内容）の枠組みとの関連を検討すると、そこには内容的に以下のような対応がみられた。

住宅観の特性を示すものであった「環境・社会といった外的な問題とかかわる内容」は、基本的に、住宅内部とその外の世界との境界をいかに設定するかといった空間のあり様に関するものといえることから、空間モデルにおける「内部と外部の関係」という建築の領域的な概念に対応した内容と考えられる。また都市観の特性を示す

ものであった自律的な性質を示す意味内容、その中でも特に「構成のシステム」は、基本的に、何らかの単位とそれによって形成される全体との関係性、つまり建築的な単位の集合のありかたに関するものといえることから、空間モデルにおける「部分と全体との関係」といった建築の構成的な概念に対応した内容と考えられる。さらに、「構成のシステム」と対立した都市観であった「知覚性・複雑性」としてまとめられた内容は、都市の構成自体が我々の眼にいかに現前するかを示すものであることから、前章で建築家の空間モデルを観念的・抽象的に枠付ける二つのあり方として示したうちのひとつである、空間の現象的側面に対応するものと考えられる。このことは、現代日本の建築家の住宅観は領域的な概念と、都市観は構成的な概念あるいは空間の現象的側面と、それぞれ密接に関わるものであることを示すものと考えられる。

以上、本章では、既報1、2でそれぞれ個別に論じた建築家の住宅観と都市観の内容を対比させて論じること、双方に類似してみられる内容および双方の差異をつくり出している内容が、それぞれ如何なるものであるかを空間モデルとの関係の中で位置付けることができた。

5. むすび

本論は、現代日本の建築家によって著された数多くの言説の中から、住宅論、都市論、創作論として括られる論考を採り上げ論じた筆者らによる既報での結果を、総合的に検討し考察するものであった。

まず、既報1での住宅論、既報2での都市論、既報3での創作論1の内容に関する検討結果を総合的に考察した。その結果、住宅論、都市論、創作論の内容の趨勢は、1970年前後を境として、建築家の創作活動を社会との直接的な関係で位置づける高き理想に準拠したものから、建築の自律的な閉じた体系の内に創作活動としての活路を見いだすものへと推移してきたと捉えることができた。このことは、近年（1970年前後以降）建築家の創作における言説上でのスタンスの取り方が、建築固有の修辭的側面へ傾倒してきたことを示すものと考えられることができるものであった。

次に、そうした建築の修辭的側面が最も明快に現れている建築家の空間モデルの意味内容を、既報3での創作の主題に関する考察結果を踏まえて再度検討した結果、建築家の空間的な思考（空間モデル）を観念的・抽象的に枠付けている基本的なあり方として、その体系的側面と現象的側面を位置付けることができた。体系的側面とは、領域・構成といった建築の実体がもたらす内容を、階層的な空間構成とでも呼べる建築的体系としてまとめようとする思考であり、現象的側面とは、そうした建築的体系としての空間を連続的に経験する総体として捉え

る思考、あるいはひとまとまりの空間の視覚的な状況として捉える思考であった。

さらに、既報1、2で個別に論じてきた建築家の住宅観と都市観に関する検討結果を対比的に考察することから、双方の特性を示す意味内容を見だし、それらと上述した空間モデルの意味の枠組みとの関係を検討した結果、住宅観の特性を示す意味内容は、体系的側面における内部と外部の関係に、都市観の特性を示す内容は、部分と全体の関係および空間の現象的側面に、それぞれ対応するものであった。このことは現代日本において、建築家の住宅に対する思考はさまざまな水準で内と外をいかにつくり出すかという領域的な概念と、都市に対する思考は何らかの単位を前提とした部分と全体という関係性(構成)の基本をなす概念と、それぞれ密接に関わるも

注

- 1) 拙稿：戦後「新建築」誌にみられた建築家の住宅観—建築家の住宅論に関する研究；日本建築学会計画系論文報告集，第428号，1991年10月，p134，注1,2参照。
- 2) 筆者らの一連の研究は、現代日本の建築家の創作にかかわる言説を、総体的かつ相対的に検討することから、現代の建築家の言語的活動の意味の広がりを探めようとするものである。このような主旨に基づいた場合、その対象となりうる資料は膨大である。理想的には書籍・雑誌など建築家が著したすべての出版物を総合的に把握すべきであるが、現実には不可能に近いと考えられる。そこで一連の既報では、建築作品あるいは建築論を社会に広く発表することによって建築の表現活動としている人々を建築家と捉えていることを考慮して、一般建築ジャーナリズムを現代の建築家の最も自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらの中から最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌に発表された建築家による論考を資料とし、分析・検討した。なお、分析範囲に関しては、現代の問題を扱うという本研究の主旨から、社会情勢が大きく変化したと考えられる第二次大戦後(1946年以降)を広く現代と設定し、それ以降1990年までとした。
- 3) 既報1：戦後「新建築」誌にみられた建築家の住宅観—建築家の住宅論に関する研究；日本建築学会計画系論文報告集，第428号，pp.125-135，1991年10月。
既報2：戦後「新建築」誌にみられた建築家の都市観—建築家の住宅論・都市論に関する研究；日本建築学会計画系論文報告集，第444号，pp.49-59，1993年2月。
- 4) 既報3：戦後「新建築」誌にみられた建築家の創作の主題—建築家の創作論に関する研究；日本建築学会計画系論文報告集，第454号，pp.77-86，1993年12月。
既報4：建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル—建築家の創作論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第456号，pp.123-134，1994年2月。
なお、本論文では、既報1～4までを総合して広義での「創作論」と位置付けている。そのことから、既報3,4での「創

作論」であることを示すものとする。

ここで得られた結果は、戦後の日本の建築家による創作的な言説空間の広がりと言界を示すものとする。この論文で採り上げた建築家の言説は、第1章まえがきでも述べたように、建築の表現活動をジャーナリズム等の媒体を通して社会的に表明している一部の建築家のものではあるが、事実上それらが現代の建築設計の世界を主導しているという否めない現実があることもまた事実である。このような現実を批判的に受けとめるという意味において、ここで得られた知見を批判的に考察し、そのことを通して建築設計の論理を模索することは、今後、建築の設計者が新たな創造的基盤を見いだす上での手がかりを与えうるものとする。

- 作論」を、本論文ではそれぞれ「創作論1」「創作論2」としている。
- 5) KJ法とは、民族地理学の分野で川喜田二郎氏によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する実施検証のプロセスまでの一連の方法を言う。ここでは、上記の中で、ある問題をめぐって関係のありうる情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義でのKJ法としている。川喜田二郎：KJ法，発想法，統発想法(中央公論社)。
- 6) 既報3：p.80，I.4～9
- 7) 既報3：p.83，I.26～30
- 8) 既報3：p.83，I.40～46
- 9) 既報3：p.83，I.31～40。なお、既報3で「部分と全体の関係」としてまとめられた創作の主題を、本論文では「階層的な空間構成」としている。
- 10) 既報4：p.80，I.38～40
- 11) 既報4では、この体系的側面のことを構成的側面としているが、本論文では、既報3の結果を踏まえて再度考察することから、これを体系的側面としている。
- 12) 石井和紘；町屋の—典型を目指して，新建築1977年11月，既報4での資料番号は35。
- 13) ここで言う「性格」的水準とは、住宅観及び都市観の具体的な意味内容に関わらず、それらがどのように語られているかということであって、基本的には思考の対象とする何らかの建築的な概念(ここでは住宅・都市)を、その機能的側面から捉えているか、あるいはそのものが成立している状態として捉えているか、あるいはその抽象的・観念的水準での意味の問題として捉えているかということである。このような考え方は建築家のマニフェストの基本的な問題であり、個々の意味内容の前提となる枠組みを形成する概念であると考えている。
- 14) 既報2：p.55，I.26～30

(1995年4月10日原稿受理，1995年8月16日採用決定)